

令和元年6月17日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02558

研究課題名(和文) German Literature and American Film: Intercultural Media Relations 1912-2012

研究課題名(英文) German Literature and American Film: Intercultural Media Relations 1912-2012

研究代表者

ケブラータサキ シュテファン (Keppler-Tasaki, Stefan)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・准教授

研究者番号：20765680

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、1910年代から1950年代にかけてのドイツ文学が特にアメリカ文化における異種メディア(例えば映画や写真といった媒体)との相互関係を通じて間メディア的かつ間文化的な性格を構築し、さらに当時のドイツ文学にとってそれは戦後の文化刷新の方向性、国家社会主義からの精神的脱出、文化産業の発見、ポップ文学における文化的グローバリゼーション、そして歴史的再評価といった機能性ないし意味をもっていたということを、論文、学会発表、単著という形で個別的に明らかにすることができた。さらに毎年一回、東京ドイツ文化会館において公開イベントを行う機会にも恵まれ、毎回ともに幅広い層の参加者を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、1910年代から1950年代にかけてのドイツ文学が特にアメリカ文化における異種メディア(例えば映画や写真といった媒体)との相互関係を通じて間メディア的かつ間文化的な性格を構築し、さらに当時のドイツ文学にとってそれは戦後の文化刷新の方向性、国家社会主義からの精神的脱出、文化産業の発見、ポップ文学における文化的グローバリゼーション、そして歴史的再評価といった機能性ないし意味をもっていたということを、論文、学会発表、単著という形で個別的に明らかにすることができた。さらに毎年一回、東京ドイツ文化会館において公開イベントを行う機会にも恵まれ、毎回ともに幅広い層の参加者を得ることができた。

研究成果の概要(英文)：The research project examined the functionality of American films for German literature and thus an eminent case of intercultural dynamics in intermedia relations. In the form of academic articles, lectures and a book, this research has shown the following functions that American film fulfils or supports in regard to German literature: cultural renewal in both post-war periods, mental escape from the Third Reich, pictorial impressions of political events and social conditions, personal self-presentation of writers, judgment on the culture industry, cultural globalization in pop literature, and historical reassurance. By courtesy of OAG (Deutsche Gesellschaft fuer Natur- und Voelkerkunde Ostasiens), three public-oriented events were held in the German Cultural Centre Tokyo. It enabled the research project to reach a wider audience and furthermore to create a broader sphere of discussion on intercultural dynamics in intermedia relations from the US-German perspective.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：ドイツ文学 文学と映画 Intermediality German Literature Comparative Literature Film Studies

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 「インターメディアリティ」に関する研究はこの数十年の間に速いテンポで進んできたといえる。しかし、ドイツ文学が他のメディア（例えば映画や写真といった媒体）のみならず他の文化との相互関係を着実に構築してきているということ、そして、はたしてそれが何を意味するのか、という点に関してはこれまであまり注目されてこなかった。実は1910年代から現在まで、ドイツ人作家達はまさにアメリカ映画とその撮影技法から大きな影響を受けてきており、かつアメリカ映画を経由することでヨーロッパならびにアジアの映画とその撮影技法に触れてきたといっても過言ではない。そして、このような文学と映画の密な関係性は、異なるメディアが遭遇するという契機だけではなく、異なる文化が遭遇する瞬間でもあるのである。この現象を解明しようとする研究は、ロルフ・ディーター・プリנקマンのポップ文学研究からはじまり、最近では「異メディア間（インターメディア）言説空間と、異文化間（インターカルチャー）言説空間のあいだに生じるネットワークング」という視点から提唱されている。

(2) 2010年以降、私はおもにトーマス・マン、ブレヒト、アルフレート・デブリー、ゴットフリート・ベンに関して、彼らの作品中にみられる文化的遭遇としてのインターメディアリティ研究を行ってきた。そこで対象としてきた文化は、1912年にハリウッドが映画都市として設立されてから経験してきた文化であり、特に、亡命、移民、そして亡命からの帰還、という一連の流れが凝縮された期間のアメリカ文化であった。私がこれまでに分析対象としてきたのは、映画について書かれたもの、映画のために書かれたもの、映画の描写を用いて書かれたもの、そして映画館用のニュースリール、ドキュメンタリー、（長編映画）カメオ出演のなかにみられる作家自身による自己演出、という4つの分野である。

(3) 本研究を開始する時点ではすでにマン、ブレヒト、デブリー、ベンの全作品（編集された手紙および日記を含む）中の映画について書かれたものは全て分析済みであった。映画のために書かれたものに関しては、デブリー全集のうち映画関係の作品を収めた巻の解説を担当する機会に恵まれた。また、映画の描写を用いて書かれたものに関しては、デブリーのベルリン小説を分析した論文をすでに発表した。映画館用のニュースリール、ドキュメンタリー、（長編映画）カメオ出演のなかにみられる作家自身による自己演出に関しては、マン、ブレヒト、レマルク、ケストナー、ザックマイヤーの研究を進めてきた。

2. 研究の目的

本研究課題を開始するにあたり、それまでに行ってきた1910年代から1950年代までの期間に関する研究を補足することを目的とした。具体的には、その時代のドイツ文学のなかでアメリカ映画が担ったであろう機能性、つまり、異文化間の相互的で動力的な関係性に注目して、そこから当時のドイツ文学とアメリカ映画の相互関係を明らかにすることである。

3. 研究の方法

本研究の方法は第一に文献研究であり、主要な対象としては、チューリッヒのトーマス・マン・アーカイブに保管されている多数の未発表の書簡や、ロサンゼルスのアカデミー・フィルム・アーカイブに所蔵されているドイツ亡命作家たちが契約社員またはフリーランスとして書き上げたハリウッド映画用の原稿が挙げられる。これらは、ドイツ作家たちがハリウッドのニーズ（真のニーズであったかどうかは別問題として）に直面して、文化的にそして映画制作という美的観点から、どのような適応性をしめしているかを知るのに重要な資料となる。第二に、1960年代以来のドイツ文学を理解するためには、アメリカ映画との対応関係の深い理解が不可欠である。そのような対比分析を通してはじめて、書き手の立ち位置ならびに映画への視点、そしてアメリカ文化への視点が理解される。また、理論的方法としては、ニコラス・ルーマンの社会システム理論および新歴史主義の社会エネルギー循環理論を解釈の一助としたい。それゆえに、「本研究の対象となるドイツ人作家たちによる映画」、そして「彼らのアメリカ体験」、「ドイツ文学」、この三つが互いに関係性をもちながら、公共的な意義をもつ社会的エネルギーとして可視化されていくという仮定を前提としている。

4. 研究成果

(1) 上記の前提のもと、1910年代から1950年代にかけてドイツ文学が受容したアメリカ映画とその文化の機能性として確認することができたのはおもに、戦後の文化刷新の方向性、国家社会主義からの精神的脱出、亡命先国としてのアメリカにおける文化的志向、政治的出来事や社会的情勢の描写的な受容、文化産業の理解、ポップ文学における文化的グローバリゼーション、そして（もっとも最近では）歴史的再評価、である。分析対象とした主なドイツ人作家は、アルフレート・デブリー、トーマス・マン、ベルトルト・ブレヒト、アレクサンダー・クルーゲ、ライナー・ディーター・プリנקマンである。個別の内容についてはそれぞれ下記の論文と学会発表において分析している。

(2) とくにデブリーに関しては、単著『アルフレート・デブリー：大衆、メディア、大都会』（Alfred Döblin: Massen, Medien, Metropolen, ISBN: 978-3-8260-6573-6, Koenigshausen

& Neumann)として出版することができた。本書はデブリーンの生涯と著作にあらわれる大都市とメディアの関係性を考察することを目的としている。賃金労働者たちから形成される共同体をつつみこむ空間として映画館を捉えていたデブリーンが、亡命ドイツ人としてハリウッドで脚本家として働きながら、映画スクリーンと観客とのあいだの相互作用にある種の革新的な潜在性をみだし、近代の大都市とそこで繰り広げられる社会的発展の過程を描写する手法をさぐっていく様子を詳細に論じている点も本書の特徴である。その躍動感あふれる描写を実現するために彼が独自に生み出したのが、「シネマ・スタイル」とよばれる、ある出来事を複数の「画像(コマ)」として描写して、映写機がコマ送りをするように、つまり、一つ一つの画像を映画スクリーンに「映写」していくような描写スタイルで、その後ドイツ文学においてはよくつかわれる手法として定着していくことになる。本書では、とくにこのシネマ・スタイルという視点から、デブリーンが映画とラジオのために書いた諸作品の分析を試みた。

(3) 上記以外に特筆すべきは、研究課題期間である3年間のあいだ毎年一回、東京ドイツ文化会館において、公益社団法人オーアアゲー・ドイツ東洋文化研究協会(OAG)ならびにドイツ学術交流会(DAAD)の協力のもと、公開イベントが行えたことである。具体的には、2016年7月に「American film in contemporary German literature」、2017年9月に「Durs Gruenbein朗読会、詩と記憶」、そして2018年11月には本研究課題の総括イベントとして「German Literature and American Film」を開催した。各回ともに幅広い層の参加者を得ることができ、本研究が公共に資するという目的にとって特に大きな成果であった。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計4件)

Stefan Keppler-Tasaki、Berliner Heimat. Alfred Doeblins proletarischer Kosmopolitismus, Alfred Doebelin (Text + Kritik 220)、招待論文、2018、3 21

Stefan Keppler-Tasaki、Die faustische Leinwand. Faust in den ersten fuenfzig Jahren der Filmgeschichte, Archiv fuer das Studium der neueren Sprachen und Literaturen、査読有、vol. 254、2017、259 323

Stefan Keppler-Tasaki、Literarische Aenderungsschneiderei zwischen 'California Myth' und Putins Dresden. Marcel Beyers Gedicht 'California Girls', Archiv fuer das Studium der neueren Sprachen und Literaturen、査読有、vol. 253、2017、348 356

Stefan Keppler-Tasaki、Resonanzen von 'California Girls', Forschung & Lehre、招待論文、vol. 6/16、2016、518

[学会発表](計6件)

Stefan Keppler-Tasaki、Mit dem Auge des weltbuergers. Alfred Doebelin als Berliner und Weltbuerger, Fudan University, College of Foreign Language and Literature, German Department、2019

Stefan Keppler-Tasaki、Villa Aurora as Sanctuary, American Comparative Literature Association, Annual Meeting、2018

Stefan Keppler-Tasaki、Alexander Kluge and Rolf Dieter Brinkmann: their encounter with American film, German Dept. Freie Universitaet Berlin、2018

Stefan Keppler-Tasaki、Brechts Privatfilme von 1928/29 und seine Filmerscheinung in der SBZ/DDR, LITPICS: Literarische Kommunikation im filmischen Dispositiv、2017

Stefan Keppler-Tasaki、Thomas Mann's Appearances in Newsreels and Documentary Films, 1920 to 1955: Towards a Film History of Modern Authorship, University of California Davis, Department of Languages and Literatures, German programm、2017

Stefan Keppler-Tasaki、Repraesentanz und Praesenz. Thomas Mann als ein deutsches Filmidol, Klassik Stiftung Weimar Sommerschule、2016

[図書](計2件)

Stefan Keppler-Tasaki、Koenigshausen & Neumann 出版、Alfred Doebelin. Massen, Medien, Metropolen、2018、328

Stefan Keppler-Tasaki 他、J.B. Metzler 出版、Faust-Handbuch、2018、616、316 325

[その他]

ホームページ等

www.keppler-tasaki.com

https://www.u-tokyo.ac.jp/biblioplaza/ja/D_00083.html

6. 研究組織

(2)研究協力者

研究協力者氏名：Elisabeth Bronfen

ローマ字氏名：エリザベス・ブロンフェン（チューリッヒ大学・スイス）

研究協力者氏名：Chunjie Zhang

ローマ字氏名：チュンジィ・ツァン（カリフォルニア大学デイヴィス校・米国）

研究協力者氏名：Jaimey Fisher

ローマ字氏名：ジェイミー・フィッシャー（カリフォルニア大学デイヴィス校・米国）

研究協力者氏名：Shuangzhi Li

ローマ字氏名：シュアンツイ・リー（復旦大学・中国）

研究協力者氏名：Wieland Eins

ローマ字氏名：ヴィーラント・アインス（DAAD/ドイツ学術交流会・東京）

研究協力者氏名：Maike Roeder

ローマ字氏名：マイケ・レーダー（OAG/公益社団法人オーアアゲー・ドイツ東洋文化研究協会・東京）

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。